

「リーディング」に対する学習者の印象

山 崎 清 水

How Do Japanese English Learners Interpret 'Reading'

Kiyomi YAMAZAKI

はじめに

「リーディング」を行う際には必ず三者が関わり、言われている。それは、「読み手」(the reader), 「教材」(the text), そして「読み手と教材との相互作用」(the interaction between reader and text)である。私達は文書を読んだ時、私達自身の蓄積された経験や知識によって、その内容を理解する。外国語での「リーディング」においても、これら三者は関わっているが、母国語での「リーディング」とは異なり、その言語の言語能力によって理解度も異なる。

「リーディング」は四技能の内、「リスニング」と同様「receptive skills」と呼ばれているスキルである。これは、「スピーキング」や「ライティング」のように「productive skills」とは対照的なもので、学習者の理解度や習得成果が表面上に表れにくいスキルである。「スピーキング」や「ライティング」は、その言語での発音・発話や作文という形になって表れるので、学習者及び指導者にも習得過程や習得成果が把握し易い。しかし「リーディング」や「リスニング」は、「receptive」という語が意味するように、学習者が「受け取め」るので、理解度や習得成果が把握し難い。従って、「リーディング」は、学習者個人のその言語能力や知識や経験の差によって、解釈も様々なものとなるので、学習者の理解度を計って、それを明確にデータとして表すことも不可能である。

また、外国語を学習する上で、「言語の問題」は大きな壁である。しかし、この「言語の

問題」を抱えながらも、「リーディング」以外の三技能—「スピーキング」・「リスニング」・「ライティング」—については、多くの者は、積極的かつ意欲的に習得しようと学習をする。英語でコミュニケーションを行う時間も機会も限られているせいもあるだろうが、実際、英語を専攻している学習者でも、「スピーキング」や「リスニング」を習得する為に、英会話学校等に通学する者もいる。また、英語の学力が乏しい者や英語が嫌いだという者でも、英会話の習得は勿論のこと、英作文の上達を目指す者も多い。

このように、同じ「言語の問題」を抱えながらも、彼等は、何故「リスニング」や「スピーキング」、或いは「ライティング」については、積極的に学習するにも拘わらず、「リーディング」に対しては、どちらかと言えば消極的なのであろうか。「リスニング」等の技能においては、「言語の問題」が壁にはならないのだろうか。「リーディング」を学習することで、他の技能にも生かされるし、英語を習得する為には「リーディング」を学習することは避けられない。「リーディング」に対してのみ、「言語の問題」が生じるということは有り得ないはずである。何故なら、「言語の問題」が壁となって彼等のモチベーションを喪失させているのなら、他の三技能習得に対しても、同様にモチベーションを失うことに繋がるはずである。「リーディング」に対してのモチベーションがないということは、「リーディング」を始めてからの学習経験が、「リーディング」を学習する意欲を喪失させた、ということが推測出来るのではないだろうか。

では、一体何が学習者を「リーディング」から遠ざける要因になったのだろうか。学習者が抱く「リーディング」に対する印象を把握する必要があるのではないだろうか。今後更に「リーディング」を学習しない者が増え続けていくことになる結果を避ける為にも、「リーディング」に対する印象を把握し、指導者側が少しでも改善していかない限りは、学習者が自発的に「リーディング」を学習することは有り得ないように感じる。

日本における「リーディング」

まず「リーディング」とは何かについて考える必要がある。「リーディング」は、単にそこに書かれているものを読み情報を得るというものだけではない。物語文であれ、記事であれ、読み手に、何らかの未知の情報を含んだ文章全体を読み、その意味内容を理解し学習するということである。外国語における「リーディング」は、その文章の語彙が未知の情報にもなり、その語彙の意味を理解し、メッセージとして書かれてある文章全体を理解することである。従って「リーディング」は、understanding the meaningなのである。

日本では、小学校から英語教育の導入が実施されるようになったとは言え、多くの学習者は中学生からその学習を始めるようになる。テキストには、彼等にとって、未知の情報であ

る英単語が含まれているので、それを読み、その意味を理解し、単語からセンテンス、センテンスからパラグラフへと、全体の意味を理解するように学習をする。初級者レベルでは、英語は外国語であるが故に、学習者がどの程度文章の内容を理解しているか否かを把握する為に、また或いは学習者の理解を深める為に、英文和訳を行い、その上で文章全体の意味を理解する方法を行う。英語の言語能力が低い学習者が対象であれば、まず訳すことによって、そこに書かれてある文章を理解しないことには、何も始まらないからである。また、中・高校では、高校や大学の入学試験をも考慮に入れた学習を行うので、受験の為に和訳することは欠かせられない。中級者以上になれば、初級者のように、訳に頼って、文章の内容を理解しなければならないという必要が減少し、且つ学習者のさらなる英語力習得を目指し、単語数の多い文章や、やや困難な内容の文章等をテキストに使用して、「リーディング」を学習することになる。大学では、受験の為に学習を取り入れる必要もないので、英文和訳に固執する必要もなく、所謂「読解力の養成」を目指した「リーディング」が実践出来るようになる。「リーディング」を「多読」と「精読」とに区別してカリキュラムを組み、学習者の「読解力養成」を目指す大学もある。

だが、外国語における読解力 (reading comprehension) は、その学習者の母国語の読解力の影響によるものが強いのも事実である。外国語の言語能力があっても、母国語での読解力が低ければ、外国語での「リーディング」に左右されるのである。Carrell(1991)は、

「第二言語でのリーディング能力が低い者は、母国語でのリーディング能力を十分に習得していないか、或いは、母国語におけるリーディング能力を第二言語でのリーディングの際にうまく使えないでいるかのどちらかである。」

と述べている。つまり、第二言語の言語能力が低い学習者は、訳すことで、第二言語で書かれてある文章を理解し、母国語でのリーディング能力に頼って、その文章の意味を探るが、母国語でのリーディング能力が低い者は、母国語に訳された文章を解釈することも困難であるということである。しかし、母国語でのリーディング能力が高く、また第二言語の言語能力がある者でも、その学習者がどのように理解しているか否かを測ることは容易ではない。文章を読むことで、推測が可能なことと不可能なことがあり、学習者個人の言語能力をも含む知識や判断力は個人それぞれ別々である。従って、当然、解釈も別々になりうるのである。これは、学習者の母国語の場合でも同じように見られるので、外国語における「リーディング」となると最もであると言える。さらに、「リーディング」は、「スピーキング」や「ライティング」のように、発話や作文といった形になって、表面にその習得成果が表れないので、

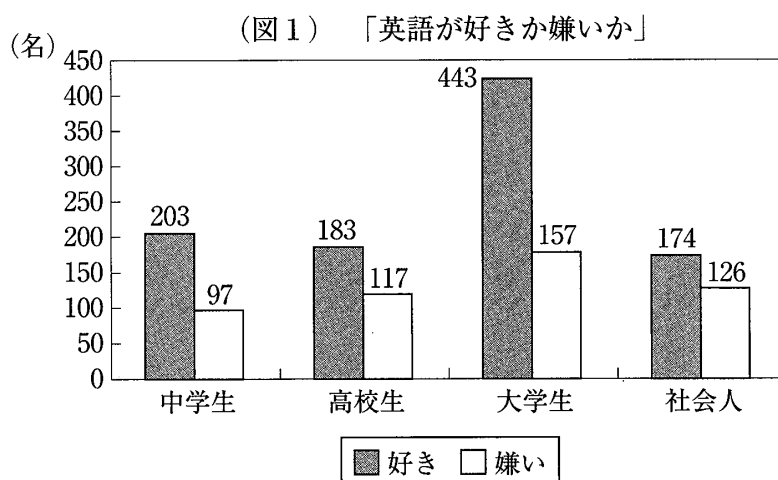
学習者の理解度を測ることは勿論、どのように解釈しているか、ということすら、確固たることが言える訳ではない。それ故に、日本では、指導者側は、学習者の確かな理解度を把握する為に、英文和訳や文章の概要を行わせるという手段を取るのだろう。

「リーディング」に対する印象の調査

調査は、過去三年間に亘って、中学生、高校生（共に300人ずつ）、大学生（600人）、さらに社会人（300人）と幅広く、東京や大阪の街頭等で行った。アンケート（Appendix 1）を社会人にも行ったのは、現在英語を学んでいる者の「リーディング」に対する印象と過去に学んだ者との比較対照を可能にする為の目的である。その為、社会人については、三十代後半（35歳）以上に協力してもらった。

1. 「好き」と「習得したい技能」

アンケートに協力してくれた1,500名中、1,003名という大多数が「英語が好き」と答えたことは意外であった。近年、大学生のみならず、中・高校生併せて、学力低下の問題が深刻化になってきているので、「英語嫌い」が多いことを予想していた。



ところが、「英語が好き」と答えた1,003名の中でも、四技能の内「習得したくない技能」では「リーディング」を選択した者が多い結果となった（表1）。「リーディング」は他三技能よりも大きく差をつけて、1,434名から「習得したくない技能」と思われている結果だった。この数は、全体の95%以上が「リーディングは習得したくない」と思っているということである。「英語が好き」という理由で、「リーディングを含む全ての技能を習得したい」ということは考えていないことが分かる。

一方、「最も習得したい技能」としては、中学生から社会人までの1,318名という大多数が、

「スピーキング」と答えた。社会人の多くも、「スピーキング」を選んだのは、国際化社会の今日では、その必要性が求められているということの表れだろう。

(表1) 「習得したい技能・習得したくない技能」

技 能		中学生	高校生	大学生	社会人
習得したい	スピーキング	289(名)	291(名)	501(名)	237(名)
	リスニング	11	6	83	54
	リーディング	0	1	2	5
	ライティング	0	2	14	4
習得したくない	スピーキング	0	0	0	0
	リスニング	0	1	0	0
	リーディング	289	293	573	279
	ライティング	11	6	27	21

四技能の中でも、特に「スピーキング」や「ライティング」は、個人で習得するには限界がある。「スピーキング」について言えば、市販されている英会話用のテキストやカセットテープを繰り返し学習しても、日本にいるということで、実践可能な状況にかなりの制限がある故、その効果は知れていると言える。「ライティング」についても、幾度となく英作文を書いて上達を試みても、その英作文に訂正が必要か否かについては、学習者にとっては判断し難いものがあるだろう。また、「リーディング」と同じreceptive skillである「リスニング」にしても、再度繰り返して再生して聞くことが出来ない場合、例えばラジオやテレビのニヶ国語放送等は、初心者にはなかなか聞き取ることが困難であり、中級者でさえも、100%聞き取れることは、殆ど有り得ないケースが多々あるので、個人でこれら三技能を完全に習得するのは容易ではないと言える。

ところが、「リーディング」は、初級者であっても、各個人のペースで自由に学習することが可能である。全くの初級者であっても、辞書を使用すれば、単語の意味が理解出来、多少なりとも内容を理解することも出来る。つまり、英単語が読めなくても、アルファベットが読めれば、辞書で意味を調べれば、初級者でも何らかの情報を得ることが可能なのである。そして、中級者以上になれば、辞書を使用すれば、6, 7割程度は内容が理解出来る。そのような理由から「リーディング」は、今更「習得したくない技能」と思われているのではないだろうか、と判断することが出来る。

実際、アンケートの「リーディングを習得したくない理由」を見ても、「辞書を使えば分

かる」という回答を選んだ者が多かった。

- ・「辞書を使えば分かる」 1432名
(中学生288名／高校生292名／大学生573名／
社会人279名)
- ・「英語使用頻度がない」 2名
(中・高生各1名)
- ・その他 0名

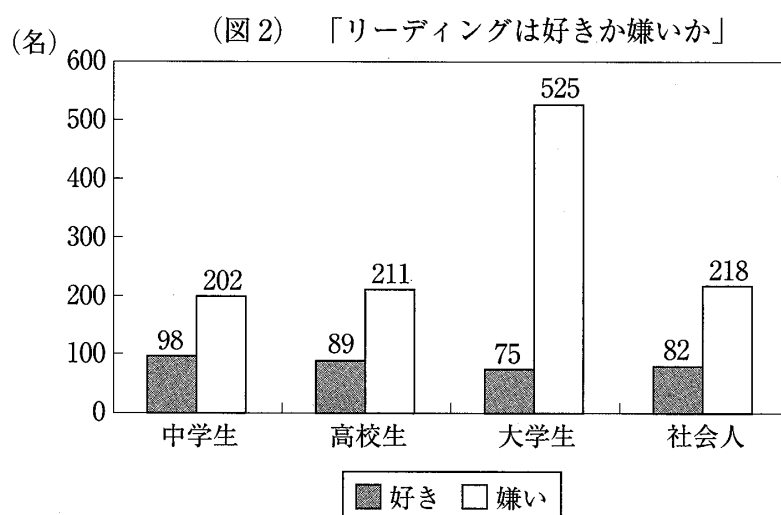
また、「習得したい技能」で「スピーキング」を選んだ理由として、最も多く挙げられたのが、「思っていることを表現したい」というものであった。今日では、多くの中・高校に於いても、native English speakersによるコミュニケーション能力の養成を実施しているので、中・高校生らの8割以上が「スピーキング」を最も習得したいと感じているのであろう。それ以外の理由については以下の通りである。

- ・「思っていることを表現したい」 1144名
(中学生251名／高校生243名／大学生421名／
社会人229名)
- ・「将来に役立つ」 150名
(中学生27名／高校生43名／大学生72名／
社会人8名)
- ・その他「外国の人と友達になりたい」 20名
(中学生9名／高校生3名／大学生8名／
社会人0名)
- 「英語が話せたら格好いいから」 3名
(中学生1名／高校生2名／大学生・社会人0名)
- 「英語が話せたら英語が出来ると思われるから」 1名
(中学生1名／高・大・社会人0名)

2. 「リーディング」の印象

2-1. 「リーディング」に対する否定的意見

アンケートに協力してくれた1,500名中1,156名が、「リーディング」に対して否定的な印象を抱いているという結果になった。元来、「英語が嫌い」な者が「リーディングは嫌い」と答えるのなら納得が出来るのだが、今回のアンケートで明らかになったのは、「英語が好き」と答えた者でも「リーディングは嫌い」と答えていたことである。これは非常に残念な結果として受けとめないとはいけない。そして、その数は、高校生、大学生になるに従って、徐々に増えていたのである。



多くの高校生や大学生らが「リーディングが嫌い」と答えたが、しかし、英語を学習する上で、「リーディング」が「役に立つ」ということは、彼等も認識していた(表2)。従って、「リーディング」は「役に立つ」が、学習するには「面白くない」、つまり、「リーディング」の学習に対してのモチベーションがないということが言えるのではないだろうか。或いは、中学生以上になれば、全くの初級者ではないので、英語を読めることが出来るから、「スピーキング」等のような実践的な技能の習得の方に興味が強いだけなのかもしれない。

いずれにせよ、中学生から社会人まで、「リーディング」は「役に立つ」が「面白くない」と答えた者が多かったことは軽視出来ない。何故なら、社会人までもが「面白くない」と感じているということは、以前から、即ち彼等が英語を学習していた時から、「面白くない」という印象を与えていたということであり、そして、それは、今日英語を学習している中学生から大学生に至る彼等に対しても、「面白くない」という印象を与え続けているというこ

とになるからである。学習者が「面白くない」という印象を抱いている以上、「面白くない」と思う「リーディング」を自ら学習するとは思えない。従って、「リーディング」の授業においても、ただ授業に出席しているだけという学習者も存在するだろう。今後更に、「面白くない」という感情から、やがては「英語が嫌い」ということに繋がることも有り得るといふことを視野に入れて考えなければならないのではないだろうか。

(表2) 「リーディングの印象」

	中学生	高校生	大学生	社会人
「役に立つ」	214(名)	279(名)	557(名)	287(名)
「役に立たない」	86	21	43	13
「面白い」	69	48	138	113
「面白くない」	231	252	462	187

2-2. 「役に立つリーディング」

「リーディング」が「役に立つ」と答えた者は、1,500人中1,337名だったが、中学生から社会人まで、最も多かった回答が、「語彙・イディオムの増加に役立つ」というものだった(表3)。しかし、「文法の役に立つ」と答えた中・高校生及び大学生らが、あまりにも少なかった。恐らく、「文法」と「リーディング」は別々の科目として捉えられ、別々に学習をしているのではないだろうか。または、「リーディング」から「文法」を学習するということに不慣れであるか、或いは、そういう経験が少ないから、そのような考えがないのではないかと推測することが出来る。

また、「リーディング」によって、英語独特の表現や文化等が学習出来るはずだが、全体的にもその数は少なかったし、「読解力の向上に役立つ」と答えた者が、全体のうち、僅か3名しかいなかったという結果は信じ難いものだった。彼等にしてみれば、「外国語」として「英語」を学習しているという意識が強い為、英語独特の表現や文化等を学んだり、reading comprehensionのスキルを習得することよりも、そこに書かれてある英文を理解することで精一杯なのだろう。特に、英語学力の低い者ならば、英文を日本語に訳すことによって理解力を深める傾向が強いので、英語独特の表現や文化等を学ぶ余裕がないのかもしれない。それ故に、「語彙・イディオムの増加に役立つ」という回答が多かったのではないかとと思われる。

(表3) 「リーディングはどのように役立つか」

	中学生 (300人)	高校生 (300人)	大学生 (600人)	社会人 (300人)
「文法」	21(名)	31(名)	53(名)	34(名)
「語彙・イディオムの増加」	277	258	499	223
「英語独特の表現が学べる」	2	7	27	27
「英語圏文化が学べる」	0	3	16	11
「読解力の向上」	0	0	1	2
その他「ライティングに役立つ」	0	1	3	2
「スピーキングに役立つ」	0	0	1	1

次に、「リーディング」が「面白いと感じる時」は、やはり「自分で好きな物を読む時」だった(表4)。近年、中・高校生及び大学生の「読書離れ」が多いと言われている中で、このアンケートの結果は非常に好ましいものだと言える。しかし、自発的に「リーディング」をさせる為に、「好きな物を読む」ことを選択するのは、個人教授をするのなら指導も可能だが、学習者の数が多い学校の教室においては不可能である。しかも、学習者自らが選ぶ書物が「リーディング」に相応しいとは限らない場合も多々有り得る。

今回、このアンケートに協力してもらった彼等について言えば、読書が全く嫌いということではないので、彼等が興味や関心を抱くような教材を選べば、「リーディングが嫌い」という数を減少させることが可能になり、さらには自発的に「リーディング」を学習させることに繋がる事が出来る。勿論、全ての学習者のニーズに応えることは不可能なのだが、「内容やストーリーが面白い」のであれば、「リーディング」に対する意識は否定的なものから肯定的なものへと変わることも可能になるだろう。

(表4) 「リーディングが面白いと感じる時」

	中学生 (300人)	高校生 (300人)	大学生 (600人)	社会人 (300人)
「内容が理解出来る」	6(名)	3(名)	24(名)	2(名)
「内容やストーリーが面白い」	34	47	94	51
「自分で好きな物を読む」	256	249	468	237
「文化や国民性の違いを知る」	3	0	7	8
その他「知らないことを知る」	1	0	3	2
「英語独特の表現を知る」	0	1	4	0

2-3. 「実践性に欠けるリーディング」

「リーディング」が「役に立たない」と答えたのは、1,500名中163名だったが、その理由で最も多かった回答が、「実践的ではない」というものだった。これは、前述の「四技能の内最も習得したくない技能」として「リーディング」が最も回答が多かったことを裏付けている。やはり、学習者にとって、実際にnative English speakersとコミュニケーションをとることが、最も実践的なものと捉えているせいだろう。しかし、実際、外国語の学習において、「リーディング」は不可欠な位置を占めている。その言語の文法や語彙力が身につくばかりではなく、スピーキングやライティング技法の習得が出来、さらには、異文化理解へと繋がっていくものである。従って、彼らの「実践性に欠ける」という印象を払拭させ、「リーディング」をすることで、他の技能の力も培われていくことを実感させればいいのではないだろうか。

- ・「実践的ではない」 104名
(中学生58名／高校生9名／大学生29名／社会人8名)
- ・「英文和訳のみ」 20名
(中学生3名／高校生4名／大学生10名／社会人3名)
- ・「文法の解説のみ」 17名
(中学生6名／高校生6名／大学生3名／社会人2名)
- ・「内容が役に立たない」 13名
(中学生2名／高校生3名／大学生8名／社会人0名)
- ・その他 9名

「語彙の増加にならない」中・高校生各2名／
「専門的過ぎる」大学生5名)

次に、1,500名中1,132名という大多数が、「リーディング」は「面白くない」と答えたその第一の理由として挙げられたのが、「文法及び英文和訳等の解説のみ」という授業体制を挙げたものだった(表5)。この結果について言えば、非常に好ましく、改善の余地があるものだと思える。彼等が「面白くない」と感じるのは、英文和訳や文法の解説のような単調な作業の繰り返しばかりだからである。従って、何か別な作業を要するものを加えれば、「面白くない」と感じる事が減少される可能性があるのではないかと言える。

(表5) 「リーディングが面白くない理由」

	中学生 (231*名)	高校生 (252*名)	大学生 (462*名)	社会人 (187*名)
「文法や和訳の解説のみ」	192(名)	142(名)	240(名)	84(名)
「教材の内容が面白くない」	29	70	199	80
「実践的な感じがしない」	1	23	11	16
その他「指導者の解説が単調」	8	17	10	7
「意味がない」	1	0	2	0

(注：*は、(表2)「リーディングの印象」で「面白くない」と回答した実数)

しかし、別の作業を必要とする授業を実施しても、学習者にとっては、教材そのものが「リーディングは面白くない」と感じることに結びつくことがある。このアンケートで、1,132名中356名が、「教材の内容が面白くない」と回答していることは軽視出来ないことである。

実際、「リーディング」の教材に関して、学習者側と指導者側とでは、大きく異なる見解があるように見られる。指導者側が、英語を学習する上で必要な知識だと判断した教材が、学習者側にとって、必ずしも必要であるとは限らないケースが昨今多々ある。教材の内容が専門的だと、英語を一般教養科目の一外国語科目として履修している学習者に苦痛を与えることに繋がり、単純な内容や教材は、専門的に英語を学習している者に苦痛を与えることにもなる。また、学習者に苦痛を与えないように教材を選んでも、学習者と指導者との年齢差によって生じる関心事の相違から、教材の内容についても異なる見解が生まれてしまうことがある。例えば、英字新聞の記事を教材に使用する場合、指導者は時事的な記事を選択しても、学習者はスポーツや芸能等の娯楽的な記事を好んだりすることがある。スポーツや芸能等に携わる人々の記事や歴史上人物の伝記等を教材に使用しても、学習者の年齢や

background knowledgeによっては、その人物を全く知らないことも在りうる故、関心を抱かない学習者には「面白くない」という印象しか与えないことになる。従って、教材の内容については、各学習者のニーズに応えるのは、非常に困難であり、「教材の内容が面白くない」と思われてしまうのは致し方がないことと言えるだろう。

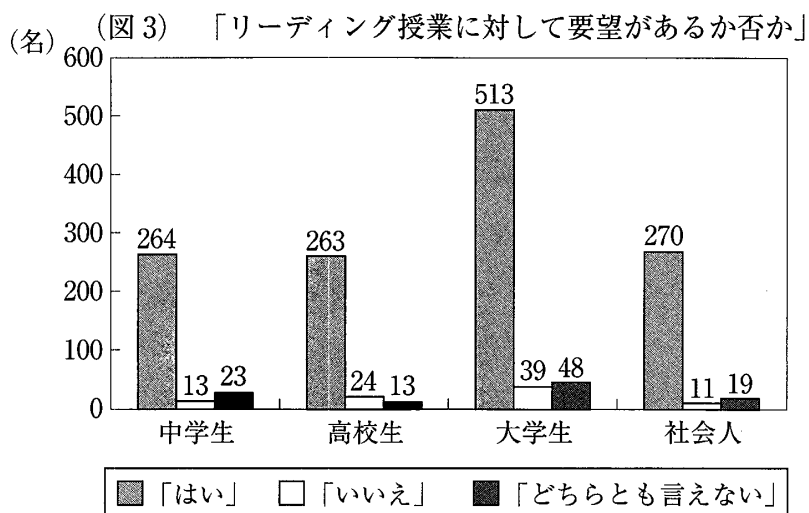
以下は、「教材の内容が面白くない」という理由である。

- ・「内容が単純」 144名
(中学生22名／高校生62名／大学生30名／社会人30名)
- ・「内容が専門的過ぎる」 126名
(中学生 0名／高校生 3名／大学生115名／社会人 8名)
- ・「物語性がない」 108名
(中学生 7名／高校生 9名／大学生55名／社会人37名)

3. 「リーディング」に何を求めるのか

アンケートの最後（設問12., 13.）では、今後のリーディング指導を考察する為にも、「リーディング授業への要望」及び「希望するリーディング授業の在り方」についての質問を行った。

まず、「リーディング授業への要望があるか否か」という設問では、「要望がある」と回答した者が圧倒的に多く、全体の87%にあたる1,310名という数に上った（図3）。つまり、「要望がある」ということは、不満を感じていることであり、英語学習者10名のうち8名が「リーディング授業」に満足していないということである。この数を減らしていくことが、指導者の課題である。



英語を学習している中学生から大学生の中で、「どのような授業を希望しているか」という設問では、1,200名中327名が「文法及び英文和訳を重視した授業」を望んでいたという結果になった（表6）。「文法及び英文和訳等の解説」の授業体制に対して、中・高校生らの334名が「リーディングは面白くない」と回答していたのだが、この質問に対しては、160名が「文法及び英文和訳を重視」した授業を望んでいた。これは、高校や大学の過去入試問題を見ても、文法や英文和訳の設問が出題されることから、恐らく、入学試験のことを考えて回答したのであろうと推測することが出来る。高校や大学の入学試験から、文法や英文和訳問題が除外されていれば、334名に近い回答者が現れていたかもしれない。実際、中・高校生ら600名中僅か32名が「行間や登場人物の言動・行動を考察」する授業を希望しているだけで、307名という5割にあたる学習者が、「文法の解説や英文和訳及び行間や登場人物の言動・行動を考察」する授業を希望していた。そのことから、彼等の理想とする授業は「文法や英文和訳」以外の「リーディング授業」なのではないだろうか。しかし、入学試験という現実にはやがては直面する以上、「リーディングは面白くない」と感じさせる「文法や英文和訳を重視」した学習を望むのだろうか。

また、大学生について言えば、「文法及び英文和訳を重視」の授業を希望していたのは、600名中僅か77名という数であった。つまり、8割近くの大学生が、「文法や英文和訳を重視」した授業を望んでいないということである。これは、前述の「リーディングは面白くない」理由として挙げられた「文法及び英文和訳等の解説のみ」という授業体制を苦痛と感じている学習者が多いということの証でもある。前述でも触れたが、中・高校生らは、高校や大学の入学試験を考慮に入れて、「文法や英文和訳を重視した授業」を望んでいると言えるが、大学生については、入学試験の不安から解放されているのである。つまり、学習者は、中・高校で十分経験してきた「文法・英文和訳重視型」である「リーディング授業」に対して、既に「『リーディング』イコール『面白くない』」という式が成立しており、大学入学後も引き続き「文法・英文和訳重視型」の授業が行われると、学習者にどのような影響を与えてしまうのか、ということが予測出来る。入学試験の為の「リーディング」ではなく、入学試験から解放された大学生だからこそ、従来のような「文法や英文和訳型」ではない「リーディング授業」を求めていると言えるし、入学試験の為の学習から解放された学習者を対象としている大学だからこそ、「文法や英文和訳型」以外の授業を実践出来る場所でもあるのではないだろうか。

一方、英語の学習を終えた社会人が望んでいた「リーディング」の授業は、「行間や登場人物の言動・行動を考察する授業」を回答した者が、全体の半数以上を占めていた。彼等に関して言えば、今現在、学校という教育機関に於いて、英語の学習をしている訳ではないの

で、当然、試験の出来・不出来や単位等を考慮し自らの身近な問題として捉えて回答したものは思えない。しかし、無責任な回答であると受け止めるには、この300名中166名という数字では無理がある。何故なら、「文法や英文和訳型」の授業を希望しているのが、300名中21名だったからである。社会人全体の僅か7%が「文法や英文和訳型」の「リーディング授業」を望んでいたということに過ぎないのである。また、大学生の回答結果とほぼ同じであるということは、社会人らが英語を学習していた時代から、「リーディング授業」の在り方は何一つ変わっておらず、全く同じであった、と断言出来る程の数字なのである。

(表6) 「どのようなリーディングの授業を希望するか」

	中学生 (300名)	高校生 (300名)	大学生 (600名)	社会人 (300名)
「文法の解説や英文和訳を重視」	111(名)	139(名)	77(名)	21(名)
「行間や登場人物の言動・行動を考察」	20	12	148	166
「上記2つを併せた指導」	166	140	207	33
その他「内容についてのディスカッション」	0	2	47	29
「指導者の解説が単調過ぎないこと」	1	2	19	0
「『リーディング』を楽しめる教材」	1	4	82	50
「速読・速解を取り入れて欲しい」	0	1	18	0
「ライティングをも取り入れたもの」	0	0	2	1
「解説・説明が面白い指導者」	1	0	0	0

アンケートのまとめ

今回のアンケート調査から、明らかに「問題」として受け止めるべきことは、以下の二点である。

1. 「リーディング」は面白くないということ
2. 「リーディング」に対する印象は、時代を経ても何一つ変わっていないということ

本文の2.1「リーディング」に対する印象でも述べたが、「英語が好き」と答えた者でも「リーディングは嫌い」と答えた者が多かったこと、そして、その理由が「面白くない」ということが大きな問題である。また、英語の学習を終えた社会人が、英語を学習している中・高校生及び大学生らと同様に、「リーディング」に対して否定的な印象を抱いていることにも、問題がある。

1970年代の高度経済成長で、英語の必要性が実感されるようになって以来、今日に至るまで、英語教育への関心はますます強くなってきている。新しい外国語学校の増設、中・高校でのnative English speakersの採用、小学校に於ける英語教育導入等、これら全てがglobal languageと呼ばれる英語を学習する為であり、従来の「読み・書き」重視の指導から、コミュニケーション能力の養成へと英語の指導が変化しつつあるにも拘らず、今回のアンケートの結果では、中学生と社会人が「リーディングは面白くない」という同じ印象を抱いているのである。アンケートに協力してもらった社会人は三十代後半なので、年齢では35歳以上となる。中学生は、12歳以上なので、両者の年齢差は、最低でも「23」以上あるという計算になる。つまり、両者間には23年間という年月がありながら、23年前の中学生と、23年後の中学生が、「リーディング」に対して全く同じ印象を抱いているとは、どういうことなのであろうか。英語教育が徐々に変わりつつあるにも拘らず、「リーディング」に関して言えば、この23年間という長い年月に亘って、同じように学習者に苦痛を与え続けている結果を生む指導を行っていた、と考えると、一指導者として自責の念を感じずにはいられない。

現在、「英語が好き」な学習者が、「面白くないリーディング」を続けることで、将来「英語が嫌い」と答えることに繋がるのではないかと、今後ますます「リーディングは面白くない」と答える学習者が増え続けるのではないかと、ということが一番懸念されて仕方がない。特に、英語を専門的に学習していない者は「面白くない」という感情が芽生えたら、「嫌い」という方向へ移り易くなりがちである。

今回のアンケートでは、「英語が好き」と答える学習者の割合が多かったことは幸いだったと言える。この数が多いうちに、「リーディング」の指導について、改めて問う必要があるのではないだろうか。「英語が好き」な学習者が多い間に、着実に「リーディングは面白い」という印象を抱かせる指導を実践すべき時だと思う。

今後の課題

英語の必要性の質は、近年大きく変化してきた。中・高校の6年間で英語を学習しながらも、英語でのコミュニケーション能力が乏しいと言われる時期を経て、学習者のニーズも、従来の受信型から発信型へ変化してきている。一斉授業で学習していた時代から、ペアワーク、グループワークや個別学習を組み合わせた授業へと変化を遂げている中、「リーディング」の指導も同様に変化すべきだ。

「リーディング」は、発信型の「スピーキング」や「ライティング」のように話したり書いたりするという作業を必要としないので、学習者は受身になりがちである。発信型の授業に比べ、受身で学習している者が多いと思われる「リーディング」の授業は退屈と思われて

も仕方がない。しかし、それは「リーディングが面白くない」のではなく、「授業が退屈」なのではないだろうか。

中・高校生は、入学試験の為に、文法や英文和訳を行う必要があるが、大学生は、その必要がないので、そのような学習者に、中・高校で学習してきた「文法・英文和訳重視型」の指導に固執する必要はあるだろうか。内容を理解することよりも、和訳することに重点が置かれた「リーディング」は、「読んで訳す為のリーディング」であって、「読んで何かを学ぶリーディング」というものではない。

本文2.2でも述べたが、今回アンケートに協力してくれた回答者は、決して「読書が嫌い」という傾向は見られなかったし、「リーディング」は「語彙・イディオム増加に役立つ」という回答も多かった。また、本文2.3では、「文法や英文和訳重視」が「リーディングは面白くない」という感情を生むことに繋がっていることも分かった。さらに、本文3.で、学習者が「リーディング授業」に求めているのは、「文法や英文和訳及び行間や登場人物の言動や行動の考察を併せた授業」を希望していることも明らかになった。

確かに、学力のない者にとっては、文法も英文和訳も困難なので、行間を読み取れるか否か、という疑問があるが、学習者の英語力を判断した上で、指導者が適宜に応じて「文法や英文和訳」を行えばいいのではないだろうか。学習者が、どの程度教材を理解しているか否かを測るには、教材を和訳させるだけが手段とは限らない。「行間や登場人物の言動・行動の考察型」でも、学習者の理解度を把握することが可能である。内容を理解していなければ、行間等を理解出来る可能性はないからである。また、学力が低ければ低いほど、文法や英文和訳を重視するだけでは、学習者が受身になって当然であり、「退屈」と思われても無理がない。彼等は、文法においても和訳においても、劣等感を抱きながら、授業開始から終了時間までを過ごすだけなのである。「行間や登場人物の言動・行動について考察」することを取り入れ、それらについて学習者の意見を求めるだけでも、学習者に「作業」が課せられることになる。このような作業には、彼等が苦手とする英語力を必要としないので、劣等感が払拭されるはずである。劣等感が払拭されれば、学習者も積極的に授業へ参加しようと、「行間や登場人物の言動・行動について考察」する「作業」をこなす為に、自発的に行間を読み取ろうと努めるので、「退屈」という意識が働かなくなるだろう。こうすることで、「退屈」という印象が薄れ、授業に対する姿勢が変わるのではないだろうか。やがては「面白い」という感情が芽生えていくのではないだろうか。

こうして、学習者は、中・高校とは違う「リーディング」に触れ、中・高校の6年間抱いていた「リーディング」に対する否定的な印象が過去のものとなり、新しい印象を抱いてくれば、「リーディングは嫌い」という数を減少出来るに違いない。今後さらに英語教育が

変遷しても、「リーディング」に対する印象が変わらなければ同じである。英語力の有無に関係なく、学習者も中・高校とは違う「リーディング」を求めているという現状が明らかになった以上、それが実践出来る場所は大学なのである。「リーディング」に対する否定的な印象を抱く者の増加を避ける為にも、大学における「リーディング」の授業の在り方も、受信型から発信型へと変化する時代に来ているのだろう。

8. 「リーディング」が「役に立つ」と思う時はどのような時ですか。

(設問7.で「いいえ」と答えた方も答えて下さい。)

- A. 文法
- B. 語彙・イディオムの増加
- C. 英語独特の表現が学べる
- D. 英語圏文化が学べる
- E. 読解力の向上
- F. その他 ()

9. 「リーディング」が「面白い」と感じる時はどのような時ですか。

(設問7. で「いいえ」と答えた方も答えて下さい。)

- A. 内容を理解した時
- B. 内容やストーリーが面白い時
- C. 自分の好きな物を読んでいる時
- D. 英語圏の文化や人々の違いを知った時
- E. その他 ()

10. 「リーディング」が「役に立たない」と思う理由は何ですか。

(設問7. で「いいえ」と答えた方のみお答え下さい。)

- A. 文法の解説のみ
- B. 英文和訳のみ
- C. 実践的な感じがしない
- D. 教材の内容が役に立たない
→例を挙げて下さい ()
- E. その他 ()

11. 「リーディング」が「面白くない」と思う理由は何ですか。

(設問7. で「いいえ」と答えた方のみお答え下さい。)

- A. 文法及び英文和訳等の解説のみで単調だから
- B. 実践的な感じがしない
- C. 教材の内容が面白くない
→例を挙げて下さい ()

D. その他 ()

12. 「リーディング」の授業対して、何か要望や希望がありますか。

はい いいえ どちらとも言えない

13. どのような「リーディング」の授業を希望しますか、希望していましたか。

A. 文法の解説や英文和訳を重視した指導

B. 行間や、登場人物の言動・行動を考察したりする指導

C. A.とB.を併せた指導

D. その他 ()

参考文献

Aebersold, Jo Ann, Field, Mary Lee, *From Reader to Reading Teacher*, New York, Cambridge Press, 1997.

Alderson, J. Charles, *Assessing Reading*, New York, Cambridge University Press, 2000.

Alderson, J. Charles & Urquhart, A.H., *Reading in a Foreign Language*, New York, Longman, 1984.

Brown, H. Doublas, Gonzo, Susan, *Reading on Second Language Acquisition*, Upper Saddle River, Prentice Hall Regents, 1995.

Carrell, Patricia L., Devine, J., Eskey, David E., *Interactive Approach to Second Language Reading*, New York, Cambridge University Press, 1998.

Croft, Kenneth, *Readings on English as a Second Language*, New York, Winthrop Publishers, Inc., 1980.

Nuttall, Christine, *Teaching Reading Skills in a Foreign Language*, Oxford, Macmillan Publishers, 1998.

江利川春雄：「英語教科書の変遷史」，「英語教育Vol.47」大修館，1999.

門田修平，野呂忠司：「英語リーディングの認知メカニズム」，くろしお出版，2001.

金谷憲：「指導法の過去・現在・未来」，「英語教育Vol.49」大修館，2001.

出来成訓：「英語制度の中の英語科の位置づけ」，「英語教育Vol.47」大修館，1999.

田辺洋二：「新世紀の英語と英語教育の方向」，「英語教育Vol.49」大修館，2001.